

日蓮における地涌菩薩

——守護の問題を中心として——

桑 名 法 晃

一 はじめに

日蓮における師自覚の表明については、法華經の行者を中心に種々に論じられてきたが、地涌菩薩に関する先行研究は主として次の二点に集約される。第一に、上行自覚の表明に至る過程についての考察で、いつ、いかなる条件を経て上行自覚が表明されたかという問題。第二に、日蓮は地涌・上行自覚を持ちながら自己と同定した説示が極めて少ないということに関わる考察で、その特色の指摘からその理由、日蓮^①上行を記す『頼基陳状』^②についての問題等が論じられている。前者については既に一定の成果が上げられており、後者については今なお論議が重ねられている。

筆者はこれまで、右の地涌自覚表明についての問題、また法華經の行者自覚と地涌自覚両者の関連性について、『観心本尊抄』や始頭本尊を中心に検討し、昨年度は法華經の行者自覚の表明について考察を行った^①。これらを受けて、本稿では

地涌菩薩の表記、中でも地涌菩薩の守護に着目したい。日蓮遺文における地涌菩薩に関する表記をみると、神力品における別付属の菩薩で末法に出現して五字を弘めるといふ説示が最も多く、次いで多くみられるのが地涌菩薩の守護の説示である。地涌の守護については、日蓮における師自覚を論ずる中において問題として触れられることはあまりないが、右の問題について更に理解を深めるために、ここでは地涌菩薩の守護に関わる二・三の問題について考察を試みたい。

二 三仏の守護との関連

三仏の守護については、諸菩薩諸天等の守護もその中核は三仏であるという指摘がみられる^②。確かに三仏を中核として諸尊の守護があるが、三仏の守護がありながらも地涌の守護が強調される場合、地涌を単独で挙げる場合もある。よって地涌菩薩と三仏の守護との関連、特に地涌菩薩が強調される意味について確認することは重要であろう。

日蓮における地涌菩薩（桑 名）

『真言諸宗違目』（定遺六四〇頁）には、三仏とともに地涌菩薩の守護が説かれるが、三仏よりも地涌が先に記され、地涌菩薩を強調する意図が感じられる。地涌単独の説示は、『観心本尊抄』の「四大菩薩の守護」、『高橋入道殿御返事』の「上行菩薩の加被」で、前者については後述するが、三仏の守護が根底にありながらも、意識が地涌菩薩に置かれていることが看取でき、後者も同様に上行菩薩の守護が強調される。

『真言諸宗違目』は『開目抄』の抄意を述べたもので、法華經の行者たる日蓮が地涌の守護を蒙るといふ説示の初出である。そこには地涌菩薩への強い意識が窺えるわけであるが、ここでは守護の主体と自覚の境地とが符合していることが更に注目される。これは迹化の菩薩の立場ではあるが、『寺泊御書』（定遺五一五頁）に既に看取でき、その後日蓮の地涌自覚の表明が『観心本尊抄』に始まり、『法華取要抄』における上行自覚の表明へと展開していく中で、『以一察万抄』に両者が符合することが端的に示される。⁽³⁾更に『高橋入道殿御返事』（定遺一〇八五―一六頁）では、値難の説示に関して自身はあくまで五字弘通の行者として記されるが、日蓮自身の自覚と守護の菩薩とが合致していることが確認できる。

これらの説示は、『真言諸宗違目』や『道場神守護事』にも引かれる『止観輔行伝弘決』卷八之三の文「必仮^ニ心^ノ固^キ神^ノ守^リ即^チ強^ク」⁽⁴⁾とも関係を有するものと思われ、自身の自

覚・境地に応じて守護の主体が決まる、守護力が増すということが考えられるであろう。

三 大曼荼羅との関連

地涌菩薩を三仏、諸天等と併記した説示も散見される。ここには地涌菩薩を特別視した様子は窺えないが、大曼荼羅との関連を想起させる。大曼荼羅は礼拝の対象とともに御守としての一面も持つが、従来大曼荼羅乃至本尊について論ずる際にこれらの説示が重視されることはなかったようである。

その初見は文永九年五月二十六日の『日妙聖人御書』（定遺六四七頁）である。日妙の捨身求法の訪問に対する賞讃の中で、日妙を法華經の行者と称し、三仏以下地涌諸天等の守護のあることが示される。「影の身にそうがごとく」という表現は常にその守護があることを意味しており、ここから法華經の行者には大曼荼羅世界が顕現し、そこに安心の世界があるものと考えられる。同年六月十六日凶顕の大曼荼羅では、釈迦多宝の他に梵字のみの勧請であり、地涌以下の諸尊はみられない。四菩薩の勧請は凶顕日時がわかる中では始頭本尊を初出とするが、大曼荼羅勧請以前から日蓮の内奥にははつきりとかかる諸尊の守護、来集が実感されていたことが窺える。

檀越に対する地涌菩薩の守護と同じく、三仏以下の諸尊が日蓮を守護するという説示もみられる。その代表例として『撰

時抄』の末文（定遺一〇六一頁）が挙げられよう。本抄では行者自覚の表明を通して自身の上行自覚が強く表明されるが、末文には上行自覚者日蓮に対して客体としての地涌菩薩があることが示される。先述の『高橋入道殿御返事』と同様、地涌乃至上行菩薩の自覚者であっても客体としての地涌菩薩の守護を頂くことにより題目五字の弘通が叶うというのである。ただ、客体としての地涌菩薩、その守護であっても、本抄の記述から守護の菩薩たる地涌は行者と常に俱にあり、主客一体となつて五字の弘通に励んでいることがわかる。守護を蒙る主体は不惜身命の題目弘通者であり、その題目受持により、まさに絶対的安心の世界としての大曼荼羅世界が実現するのである。

題目五字は教であるが、それを行じ証していくその証の世界が南無妙法蓮華経の五字七字として表現される。この題目の付属を受け受持する姿こそが大曼荼羅の中尊たる南無妙法蓮華経であり、そこには自ずと三仏をはじめ四菩薩以下の諸尊が来集し、その行者所居の土も常寂光土となるのである。

四 『観心本尊抄』の「四大菩薩の守護」について

このようにみてくると、『観心本尊抄』流通分で四大菩薩の守護が説かれるのは、やはり自身の地涌自覚に基づく説示の表れであることが考えられる。だが、本抄の守護については、

日蓮における地涌菩薩（桑名）

日蓮は守護を蒙るのか、守護力を発揮するのかということでは解釈が分かれる。近年の先師の釈には、①「四大菩薩」は日蓮自身を指し、末代幼稚を守護すると捉える釈、②日蓮は「此人」に含まれ、四大菩薩の守護を蒙るとする釈、③その何れの捉え方も可能であるという釈の三つがみられる。

①の釈では、この四大菩薩は末法出現の菩薩で、それは本化の応現たる日蓮を指すに他ならないとする。日蓮が守護力を発揮するという説示は遺文上に散見され、法華経受持弘通の功德による守護と、釈尊或いは諸天等に申し上げるといふ例が確認される。何れの場合も日蓮は単なる日蓮ではなく、法華経を色読した、法華経に証せられた日蓮、法華経の行者としてその経力或いは釈尊の慈悲や誓願・菩薩行を背負った日蓮である。守護力を持つとは、かかる法華経・釈尊と一体となったという自覚に基づく叙述であると思われる。その意は既に『真言諸宗違目』（定遺六三八頁）にみられ、『顕仏未来記』（定遺七四二頁）にても確認できる。ここから法華経を実修実証した立場で著された『観心本尊抄』においても、その日蓮が守護力を発揮するという解釈も十分に成り立つであろう。

しかしその一方で、日蓮自身に関わる地涌菩薩守護の説示は日蓮は専ら守護を蒙る側として説かれる。故にこの点から考えるならば、本抄の記述も日蓮は守護を蒙る側と解すべき

日蓮における地涌菩薩（桑名）

であろう。⁽⁸⁾ だが法華經の行者或いは地涌自覚者日蓮としての叙述においても、守護される日蓮、守護する日蓮という両側面が認められるのであって、その両様の解釈が成り立つといえるであろう。

五 まとめ

以上、地涌菩薩の守護の説示を中心として考察を試みた。

まず、守護の主体と自覚とが符合していることを論じたが、ここから地涌の守護が強調される中に、日蓮による地涌自覚の高まりを窺うことができよう。『開目抄』では地涌自覚にあえて全く触れないが、『真言諸宗違目』に着目することで、『開目抄』における法華經の行者自覚の表明とその内意における地涌自覚との関連を更に理解することができるであろう。

また、大曼荼羅乃至本尊について考察する際に、三仏以下地涌等の諸尊の守護の説示はより注目されるべきで、大曼荼羅世界実現という観点からも、日蓮はもとより弟子・檀越それぞれでの立場から更に考察を進めていく必要があるであろう。

『観心本尊抄』における守護の記述をめぐっては、日蓮における守護力という点に着目したが、守護力を發揮する日蓮が守護を蒙る存在でもあり、多様な面を同時に有することがわかる。日蓮が守護力を持つことの背景には、釈尊・法華經の力、主師親三徳論、三大誓願等があることが考えられ、これ

らの点についても改めて別に論じたい。

- 1 拙稿二〇一四。
- 2 渡辺宝陽一九七一、七六頁。
- 3 「地涌千界一分蒙加備行者也」(都守基一九九八、九六頁)。
- 4 大正第四六卷四〇一頁a。
- 5 望月歎厚一九三三、三六四頁等。
- 6 茂田井教亨一九九五、一九六頁等。
- 7 茂田井教亨一九八三、一三二―一頁等。
- 8 ただ日蓮が守護を蒙るといふ説示は専ら値難にふれた叙述であることからすれば、必ずしも他の例に倣う必要性はないともいえる。

〈二次文献〉

- 桑名法晃「日蓮における師自覚の表明について——佐渡期以降遺文における「法華經の行者」の表記を中心として——」(『印仏研』第六三巻第一号、二〇一四、一八一―一八四頁)
- 渡辺宝陽「日蓮聖人における「三仏」帰命」(『大崎学報』第一二五・一二六号、一九七一、六〇―八〇頁)
- 都守基一「『法華取要抄』の草案について」(『大崎学報』第一五四号、一九九八、七三―一三九頁)
- 望月歎厚『日蓮聖人御遺文講義』三卷(龍吟社、一九三三)
- 茂田井教亨『本尊抄講讀』(山喜房佛書林、一九八三)
- 茂田井教亨『法華經者の精神』(大蔵出版、一九九五)

〈キーワード〉 日蓮、師自覚、地涌菩薩、法華經の行者、守護
(立正大学大学院)